

喜界島の親族組織

| | |
|-----|---|
| 著者 | 須藤 健一 |
| 雑誌名 | 日本民俗学 |
| 巻 | 78 |
| ページ | 51-61 |
| 発行年 | 1971-12-20 |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5184 |

喜界島の親族組織

須藤健一

はじめに

奄美諸島の親族研究は日本復帰を機に行われた九学会連合調査以来特に進められ、その内容が明らかにされて来た。^①そして本土の

「家」社会に対して個人の「血縁」を重視する社会とか、双系的ないし多系的な「ハロージ型親族集団」^③の社会の規定もなされた。本報告は、そのような「血縁」を重視し、双系的親族集団を形成する社会組織に興味を感じた筆者が、昭和四十五年と四十六年との七月

喜界島の親族組織

から八月にかけて行なった。延べ日数五十日間にわたる調査に基づくものである。喜界島を調査地としたのは、他の奄美諸島については△ヒキ④系の親族集団の報告がなされているが、喜界島では報告されていない点の疑問と野口武徳氏の御教示によるものであった。調査から△ヒキ系^④の親族用語は島全域に存在する事が確認出来た。本稿では△ヒキ系^④を含めた親族組織の分析を試みるものである。

〔注〕

- ① たとえば、蒲生正男「部落組織と親族組織」・関敬吾「奄美大島字検村田検部落、沖永良島和泊町西原部落」（九学会連合奄美大島連合調査委編、『奄美—自然・文化・社会』一九五九）
 - 中根千枝・「△ヒキ」の分析—奄美双系社会の血縁組織—（『東洋文化研究所紀要』三三三、一九六四）
 - ② 中根氏（一九六四）、前掲論文一五〇頁。
 - ③ 蒲生正男 「日本の親族組織」
 - 『文化人類学』角川書店一九六七 三三二頁。
 - ④ 喜界島では「チュヒチ」などのように「ヒチ」と発音される。
- 以下では、△ヒキ系^④によって表わす事にする。
- 村武精一 「日・琉族制研究における構造論」（『日本民俗学会報』五四、一九六七 六頁）

（一）概 況

喜界島は奄美群島の東北端に位置し、南北に長い。面積五六平方
 軒の小島である。三三部落より成り、人口二一、七三三人（男・

五、四四九人、女・七、二七四人）である。地形は最も高い所で海
 抜三米で概して平坦な隆起珊瑚礁から出来ており、耕地は水田六
 三ha、畑一、六七六haである。部落（シマと呼ばれる。）の起り
 に関しては明確には判明しないが、それぞれに異った伝承を持って
 いる。先祖が沖繩から来たとか、島津藩の武士が流されて来たとか
 言われている。しかし年中行事や通過儀礼などの慣行はほぼ均一化
 しており、ある部落にのみ固有なものは見出せない。現在は行事・
 儀礼を行う部落と行わない部落があるが、その相異は維持力の問題
 に帰因しているように思われる。すなわち部落の規模と他出者の増
 加による担い手の減少とに関連していると思える。明治三十年代に
 まで、聴書きによって復原してみると、名称の若干の違いはあるも
 のの、内容は同質であった事が窺える。生業は他の奄美諸島と同
 様、旧幕以来 キビの栽培が中心で、製糖による収入が経済的支柱
 になって来ている。個人資本による共同労働の製糖という形態は、
 馬力から動力へとの変化はあったが、昭和三十年過ぎまでは一貫し
 て行われていた。ところが、昭和三十四年に大型製糖工場が完成す
 ると、様相は一変した。自家製糖による黒糖製造は殆んど行われな
 くなって、キビを伐採して工場へ売り渡す形になり、イータバと呼
 ばれた伝統的な製糖の共同労働形態は見られなくなった。

水稲栽培は、北部の山手部落では現在も二期作が行われている
 が、他の部落では作られてない。昭和三十年代までは、祭日用に全
 島の的に作られていた。甘藷は主食として作られていたが、キビ販売
 などによる収入が安定して来てから米が主食になり、現在は僅か作
 られてるのみである。生産暦を簡単に述べると、キビの伐採が一月

から五月頃まで、稲の一期作が五月から七月、二期作が八月から十月。キビの植付けが五月と九月に行われる。現在稲を栽培してない農家では、キビの刈り取りが終了する六月から翌年の一月頃までが農閑期で、男子の阪神方面への出稼ぎが盛んである。一方女子は、その期間大島紬の機織りに従事し、大きな経済的支えになっている。紬織りは明治年間より女子の仕事として続けられて来たが、昭和四十年頃から織賃が上昇し、大きな現金収入源となっている。親族組織に関しては、△ヒキ▽△ハロージ▽△ソオーデレチャー▽が親族用語として全島的に存在し、△バラ▽も限定された地域であるが存在している。

この報告の資料を収集した上嘉鉄は、島の南端に位置し、海岸に面した、農村部としては最大の人口を有す。二七一世帯、人口一、〇九九人(男：四七二人、女：六二七人)である。農家一戸当りの耕地面積は、島でも多いと言われる。キビ栽培を中心とする畑作が主で、水田は皆無である。漁業は良い入江に恵まれた港があり、盛んである。漁船(三ト未満の動力船)の保有数は一二隻で、喜界町全体の保有数六四隻から見れば多い。漁業に関しては伝統がある。大正に入り、糸満漁師が来村し、追い込み網による漁を始めると、部落民も漁法を修得し、トビウオ、サガマーなどを捕り、山手の他部落にまで売りに出かけた。その頃(大正七・八年)は、サガマー組合と呼ばれる三〇人一組のものが、一号組合から六号組合まで出来、相当の漁獲高があったと言われる。しかし大正十年を境に衰微し、現在はその面影もなく、サワラなどを一本釣りによって捕獲する漁法に頼っている。部落の景観は、北側の高さ三〇〇米の崖の中腹

喜界島の親族組織

に保食神社とムヤと呼ばれる共同墓地があり、一段低い所に部落共有の平坦な広場があって、六月灯・盆踊り・八月踊り・相撲などの部落行事の祭場になっている。家並みは、更に一段下った所であり、東西に一キロ米にわたって建っている。明治の初め頃は四十七軒の家数が部落の中を通る道路の北側に並んでおり、分家がその南側に家を建ててて拵がったと言われる。それはオヤウジヤ(親氏家：宗家)と呼ばれる本家筋の家が北側に多い事からも窺える。行政上、東、中、西の三組に分れ、区長が一名ずつ選出されている。婚姻は、ここ十年來は、村外婚が多くなつたが、それ以前は他部落の人と結婚が極端に少く、他部落の人と結婚すると、「ハッサクカラ(酒入れの器)の腹がわれ、ジュウ(重箱)のノリがはげる。」と言われて、嫌われたと言う。人口の島外流出は大正十年過ぎから顕著に見られる。その時期は丁度、漁業の衰退期で、農業に見切りをつけた二・三男が出稼ぎに島外へ出た。主に阪神方面へ行って、船乗りになる者が多かった。上嘉鉄は、家数が多い事もあって、島内でも伝統的な行事・儀礼・その他の慣行が良く存続されている部落であると云えよう。

〔注〕

- ① 人口は昭和四十五年十月現在、面積、耕地面積は、昭和四十六年版町勢要覧による。
- ② 崖の中腹をくり抜いた洞穴で、その中に墓(テラと呼ばれる)を置いてある共同墓地である。昭和十八年に防空壕として使用されるために、中の墓が外に出され現在は空になっているものが多

い。全部で八個所ある。

- ③ 分家に相当する云葉は存在しない。分家することを「ヤイワイ（家割り）する。」と表現する。詳細は次章注③参照。

(II) 親族組織

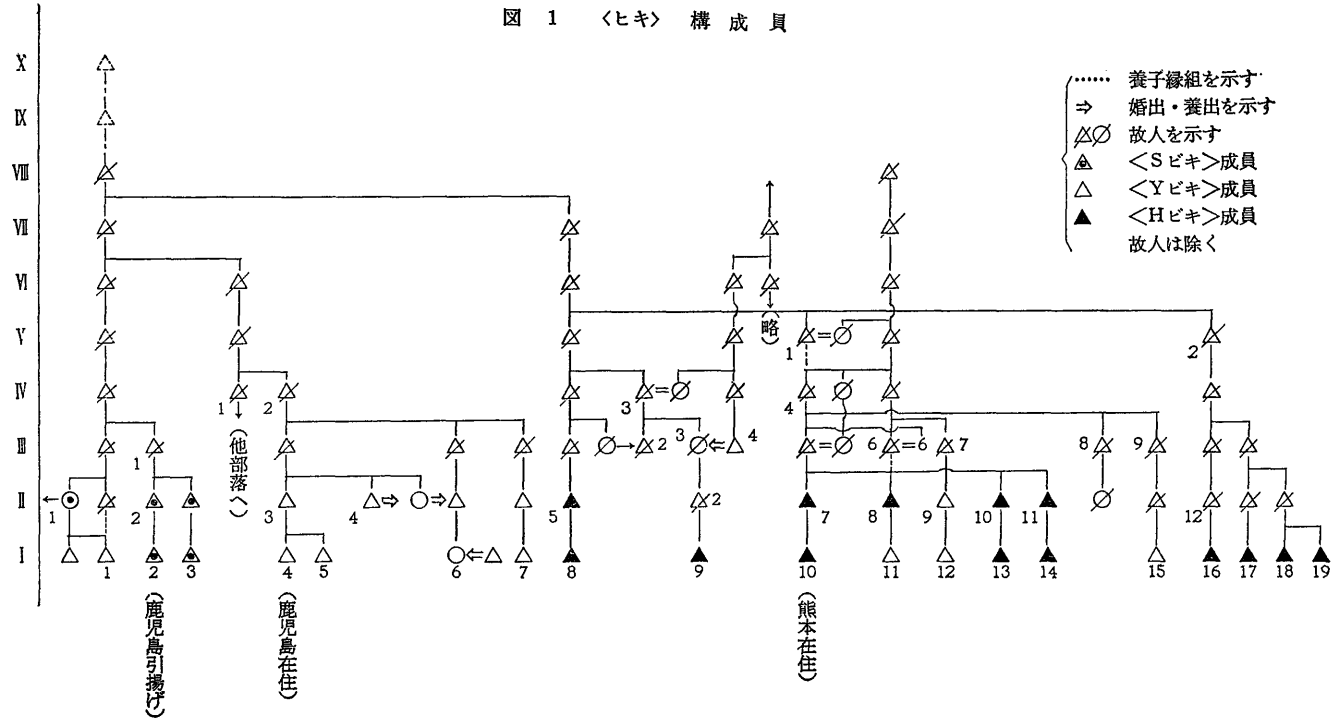
(1) \wedge ヒキ \vee の性格

\wedge ヒキ \vee が村落生活で意識されるのは、配偶者の選定、選挙、祖先祭祀やシマアンビ（祭り）の時だと言われる。配偶者を選定する際は、「畑を買うならアラジの付いたのを買え、嫁を貰うなら \wedge ヒキ \vee を見て貰えと俚俗にもあるように、 \wedge ヒキ \vee の良し悪しが重要な規準になる。 \wedge ヒキ \vee の良し悪しは、先祖の行状、功績などによって判定される場合が多く、たとえばスウター（黍横目などの旧幕時代の役人）だったとか、先生や医者だったとか、農業に専念し財を築いたとかである。それが何世代かにわたって、子孫に発現すると、特徴的性格を付せられ、社会的な評価観となるのである。このような事は本土でもよく耳にするもので、たとえば東北地方のマケ、マキ、関東地方のイットウ、イッケ、西日本のソソ、スジなどを代表的なものとしてあげられよう。親族関係を表わすタームに、特徴的性格を付けて、ある種の類別基準にするというやり方は、 \wedge ヒキ \vee に限った事ではないと言えよう。ただし、その基準が個人単位であるか家単位であるかの検討の余地はあるけれども、ここでは、 \wedge ヒキ \vee と本土の親族用語の性格的類似性を指適するに留める。選挙の時は、大きな \wedge ヒキ \vee を持っておれば当選すると言われ、 \wedge ヒキ \vee の大小が問題にされる。祖先祭祀においては、自分の

先祖の出た \wedge ヒキ \vee のウヤムトウヤイ（先祖元家）のテラ（墓）へ供物を上げるといふ行動をとる。八月踊りなどの祭りには、 \wedge ヒキ \vee の成員が踊ったりすると、一緒に踊り、相撲などをとると応援するという具合である。そのような生活の場面で見られる \wedge ヒキ \vee の構成原理について考察する事にしよう。先に述べた特徴的性格を有する \wedge ヒキ \vee （一般に \wedge スウタービキ \vee とか \wedge 先生ビキ \vee と呼ばれる。）と血縁関係があると、アンマー（母）の \wedge ヒキ \vee だからとか、アニイー（祖母）の \wedge ヒキ \vee だから自分の \wedge ヒキ \vee でもあるという風に関係付けられるのである。このような認知は、たとえば著名な人物（政治的にと文化的に）が出現した時などに顕著にみられるようである。その際、父方・母方を区別する事なく、血縁関係が迎れる限り、関係付けられて、 \wedge ヒキ \vee だと意識されるのである。潜在的可能性としては、自分より一世代上では父方・母方に二つ、二世代上では四つという具合に²ⁿ（nは世代数）の系が考えられる。それらの系の中から、選択して自分と関係付けた時に、 \wedge ヒキ \vee 意識が顕在化する事になる。このように、血縁関係を認知する場合は、 \wedge ヒキ \vee は双系的性格を有すると言えよう。

一方、姓や固有の名前とか屋敷名を付けて \wedge Sビキ \vee とか \wedge Hビキ \vee と言う場合には様子が異なって来るように思われる。自分は母の \wedge ヒキ \vee でも祖母の \wedge ヒキ \vee でもなく、代々続いている「カトク（家督）の \wedge ヒキ \vee になる。」とか、「ワアーチャーチュフィチドー」（「我々は同じ \wedge ヒキ \vee だよ。」の意）として相互に認知し合うより固定化した集団を形成する時は、「父の \wedge ヒキ \vee に入る。」と言われる。「カトクの \wedge ヒキ \vee 」、「父の \wedge ヒキ \vee 」への所属と

図 1 <ヒキ> 構成員



なり、父系(男系)を強調している事が窺える。その事を事例1
 によって考察してみよう。これは△ヒキ▽の関係にある人をあげて
 貰い、その系譜関係を聴書きで系図化したものである。1—1家が
 系図上では、オヤウジャー(宗家)で部落でも最古の家の一つであ
 ると言われるが現戸主で何代になるか正確には判明しない。各家の
 関係を見ると、現戸主から六代前に1—8家が、五代前に1—4家
 がヤウワイ(分家)し、更に1—1家から1—2家、1—4家から
 1—6・1—7家、1—8家から1—10・1—16家が分家した。そ
 して1—3、1—5・1—9・1—15・1—17・1—18・1—19の
 各家が、それぞれ図の如くに分家したものである。現時点で、姓を
 つけて、△チュヒチ▽として、固定化した集団は、1—1家を宗
 家元家とする1—2・1—3の△Sビキ▽と1—4家を宗家とす
 る1—5・1—6・1—7の△Yビキ▽と1—8家を宗家とする
 1—9・1—10・1—11・1—13・1—14・1—15・1—16・1—
 17・1—18・1—19の△Hビキ▽である。これらの集団結合の目安
 となり、同じ△ヒキ▽成員だとの認知の基準となるのは、改姓前の
 姓(一字姓のものが多かった)とテラ(墓)の所在地である。姓
 は、1—1家、1—4家、1—8家の宗家は異なるが、それらから
 の分家である各家はそれぞれ宗家と同じ姓を大正年間までは殆んど
 名のついていたと言われる。これは当地のウツシイハイの分家慣行と
 関連していると言えよう。テラはすべてイーリンムヤ(西の喪屋)
 にある。このムヤとテラに関する伝承によると、ムヤの中に安置さ
 れているテラは、元々は一つで三軒の先祖が一緒に納骨されたが
 時代の経過とともに骨が一杯になり、三つのテラに分け、その配

置も西側から大きい順に1—1家、1—8家、1—4家としたと言
 う。ムヤの中にあつたテラも、昭和十八年に、防空壕としてムヤが
 使用された為に外に出された。それに伴って、各家のテラも宗家の
 オヤデラの周辺に置かれるようになり、中であつた時程明確ではな
 くなつたそうだが、現在でも裏付ける事が出来る。そしてこれらの
 △ヒキ▽集団も、下位集団を形成し分節化して行く傾向にあるよう
 で、△Hビキ▽では、1—8家・1—10家・1—19家を中心とする
 傾向にある。たとえば、1—12が死亡し、葬式を出した時に、1—
 8家よりも1—17家の方が大きな役割を果たした事から、本家・分家
 の間柄は三・四代経つと次第に薄らいで行き、より新しい分れの関
 係によるグループピングが生ずると言えよう。この事は、△Sビキ▽
 ・△Yビキ▽・△Hビキ▽の関係においても同様であつた可能性が
 強い。即ち、テラの所在地から、元来は、1—1家を宗家とする
 △ヒキ▽集団が形成されてたのが、分節化して三つの△ヒキ▽集団
 になつたと推察されるからである。今迄のところ、△ヒキ▽の關係
 を当地に居住する戸主(ある時は家として扱つた)を中心に述べて
 来たが、島外や他部落への他出者(婚出者も含む)、部落内婚出者、
 更には、△ヒキ▽集団への所属が個人単位でなされるのか、家単位
 でなされるかという点を事例1によって考察してみたい。図2は、図
 1の1—8家の系図を詳細にしたものである。B₂(図1の1—5)
 からすると、姉b₁、娘a₁a₂は部落内の他△ヒキ▽の男性と結婚した
 が同じ△ヒキ▽成員だと言う。それらの子女は夫の△ヒキ▽になる
 とも言ふ。A₃は長男、A₄が戦死したので家を継ぎ異なる△ヒキ▽からの
 妻a₂との間に三人の娘がいるが娘はB₂・A₃と同じ△ヒキ▽成員だと

喜界島の親族組織

言われる。a₃は島内他部落へ、a₄は鹿兒島へ婚出し、A₄・A₅は大阪
 ・東京でそれぞれ独立したが△ヒキ▽成員だと言われる。妻b₂は
 △ヒキ▽ではなく、妻の甥A₆も異なるし、母c₃の生家の後継者(A₇・
 B₄)祖母d₁の後継者(A₈・B₅)も異ると言われる。この事から、距
 離的遠近は問題にされず、島内他部落であろうが、日本本土であろ
 うが△ヒキ▽成員であり、異なる△ヒキ▽へ婚出した女性は、当人は
 △ヒキ▽成員であるが、その子女は夫の△ヒキ▽に属す。異なる

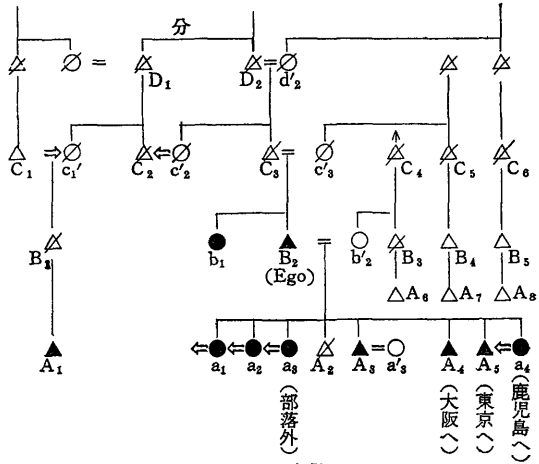


図2 △ヒキ▽成員

▲ ● <ヒキ>成員 (故人は除外)

△ヒキ▽からの妻、及び妻の consorts は異なる△ヒキ▽に属す。母
 ・祖母(父の母)に関しても同様である。なおこのような、婚姻を
 契機として生ずる△ヒキ▽と△ヒキ▽の関係を△エンピキ▽と呼ん
 である。そして固定的な集団への帰属に関する場合の△ヒキ▽は、
 父系(男系)的性質であると言えよう。しかし図2のA₁の場合(同
 様に、図1のⅡ7~11の場合)のように、養子縁組みが生ずると、
 父系(男系)の血縁(生物学的な)が断絶するにも拘らず、△ヒ
 キ▽成員だという事態が生ずる。図2で、c₁は母方の異なる△ヒ
 キ▽成員であるイトコC₁と一緒にした。それは、c₁の父D₁がB₂家
 から分家したが、c₁一人を残し家族全員が事故で死亡したためにC₁
 を婿養子に迎えた家継いだという。C₁自身はB₂と同じ△ヒキ▽成員
 ではないが、孫A₁は同じで、その理由は、B₂家からの分れだからと
 言う。図1のⅡ7~11の場合は、Ⅰ-8家からⅠ-11が分家した
 が、Ⅰ-11夫婦には子供がなく、Ⅰ-12家から養子をとって、あと
 を継がせたもので、Ⅰ-8とは血縁関係(生物学的)がないが同じ
 △ヒキ▽だと言う。それは先祖がⅠ-8家から出ているからとも言
 う。この二例はそれぞれ、父系血縁・血縁関係(生物学的)が存続
 しなくても△ヒキ▽成員だという場合である。養子(両養子)に行
 くのは、「先祖の面倒を見て、家をまもるためだ。」と意識されて
 いる事が窺える。養子は父方の(父系の)血縁者からでなければな
 らないとの規制はないが、その方がより好まれると言う。この二例
 の場合は、父方のオバの婚家先へ養子に入ったものである。聴書き
 によって、婿養子一九例、両養子一〇例を目下の所得ているがいず
 れも部落内養子である。このうち、父の生家(父の兄)への養子縁

組が二例、母の生家への養子縁組が七例、非血縁者が一八例、不明二例となる。この数字の上からは、先に述べた意識とはズレがある事が窺える。事例の場合は、一代だけ女系或いは血縁が絶えても、次世代からは、男系的に血縁が辿られている。しかし、養子縁組の事例中、五例は男系を辿っての△ヒキ▽へ帰属すると言う場合があり、うち三例は、分家の家に見られる。先に見た二例の事例の場合は、△ヒキ▽成員である理由として述べた、「分れであるから。」とか「出であるから。」という觀念から、集団への帰属の単位が、個人の血縁関係というよりは、家の系譜関係が優先されているとの解釈も出来るように思う。そして、養子縁組による養子と養家先の関係を見ると、土地の管理は養子に任されるし、祖先祭祀(盆・ウヤンコーなど)の祭祀権も両養子の場合は養子が実修するし、(ただし婿養子の場合は養家の娘である妻が行うが)墓は養家に、位牌も養家の先祖と一緒に記される事などから、養家に組み込まれる性質であるとの見方も可能ではないかと思う。この観点からは、血縁が擬制されるとの解釈も成り立つように思える。してみると姓をつけての固定化した△ヒキ▽集団への帰属に関しては、△ヒキ▽は patrilineal を構成原理とするとは言えないにしても、父系(男系)が強調される性格であると言えよう。以上見て来たように、血縁関係の認知というレベルでは、双系的性格で、集団への帰属というレベルでは、父系(男系)的性格を、△ヒキ▽は有すると言えよう。

[注]

- ① 畑の周囲にある、蘇鉄などの生えた畦などの未開墾地。

② 総合的に比較検討したものとして、渡辺友左「社会構造と言語の関係についての基礎的研究(2)」(国立国語研究所、一九七〇一六一—一〇一頁)があげられる。

③ 当地で、本家・分家の関係を指す言葉は存在しない。分家から本家(直接の)をオヤムトウヤと呼び、孫分家から総本家をオヤウジャーと呼ぶ。それらを、「宗家」・「親氏家」とそれぞれ表わす事にする。

④ 姓をつけて呼ぶ場合、個人はそれらの△ヒキ▽のどれか一つに所属する性質である、姓としては、栄(栄枝)、生(生島、生田、生野など)、幸、幸得、広(広瀬、広岡、広司)・値・安(安田)・前田、前岡・原・美代・友・盛・富・西(西原・西山)・福岡・福永・福村・説などが上げられる。これらの△ヒキ▽集団が、氏子集団などの具体的な集団を形成してはいない。

⑤ 島外の男性と結婚し、部落に居住した場合が二例、離婚して生家へ子供を連れて帰った場合が一例見られる。これはいづれも子供から見れば母の父の△ヒキ▽に属する。

(2) △ソォーデンチャー▽・△ハロージ▽

△ヒキ▽・△エンビキ▽と重複して、△ソォーデンチャー▽・△ハロージ▽と呼ばれる親族関係(集団)がある。△ソォーデンチャー▽は、兄弟姉妹衆という意味であるが、実際に使われる場合は、双方のオジ・オバ・イトコ位にまで延長される。更に血縁に限らず、配偶者の兄弟・姉妹をも含むとも言われる。△ハロージ▽はそれよりも遠いフタイトコ・ミイトコや姻戚関係にある異世

代の人に対して用いると言われる。△ソオーデンチャー▽は、日常生活での援助や通過儀礼などの相互扶助的關係やキビの伐採の際などに△イームイシー▽（結い）と言われる共勞關係を結び易い、親密で気易い間柄だと言われる。それに対し△ハロージ▽は古い關係で、付き合ひも薄くなると言われる。これらの事から、△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽は、Ego Centered な、Kindred の概念で理解出来る性格であると言えよう。△ハロージ▽に関しては、喜界島全体に共通しているが、過去に血縁や姻戚關係のない者同志が結婚すると、半年間とか子供が出来るまでの期間を、「△ミイハロージ▽になった。」と言う。これは新しくシンセキの間柄になったとの意味である。イトコ同志とかフタイトコ・ミイトコの關係にある者の結婚の場合はそうは言わない。△ソオーデンチャー▽の親族行動について簡単に述べると、配偶者の選定とか財産の処分、或いは畑を預けるような場合は、父方のオジ・オバの意見が母方のそれよりも重視される。また結婚式（ドゼソリ）の迎え人（ムケラー）・送り人（ウクラ）も父方の親族が優先されて選ばれる。この事から、△ソオーデンチャー▽と言われる。双系的な性質の親族關係者の中でも、權利義務の實際的關係においては、双方が対等というよりは、父方親族の優越性が指摘出来る。いづれにしても、△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽は父方・母方を区別しない、Ego Centered な性格で、Kindred の概念で理解されると言えよう。そして△ソオーデンチャー▽が、親族行動においては、より重要な位置を占め、図式化して見るなら、親族關係の中核部であり、△ハロージ▽がその周辺部であると言えよう。また、双系的な

喜界島の親族組織

構成の中でも、より父方親族が重視されるという性格もあわせ持っている。

〔注〕

① △ハロージ▽の關係にある人々を総合的に表わす時、△ハロージンチャー▽との言い方もなされる。

② 筆者は、△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽の差を血族と姻族だとして発表した。（昨年度・民族学・人類学連合大会、於久留米）その根拠は、聴書きによる資料と、△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽の實際に使用される時の言い方の相違によった。即ち、「△ハロージ▽になる。」とは言われるが「△ソオーデンチャー▽になる。」とは言われない事から、前者が婚姻などを契機とする後得的性格であるのに対し、後者は、出生によって決定する生得的性格であると判断したからである。このような区別をインフォーマント全員が意識的に行っているわけではないので、更に検討の余地がある。

(3) △ヒキ▽と△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽

△ヒキ▽と△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽を較べると、「△ヒキ▽は先祖代々の古い關係で、△ソオーデンチャー▽、△ハロージ▽はもっと新しい關係だ。」という事から前者が、Ancestor Centered な性格で後者が Ego centered な性格である事が窺える。しかし△ヒキ▽の成員であり、△ソオーデンチャー▽・△ハロージ▽である場合もある。例えば図一で、Ⅰ—Ⅲにとつて、Ⅰ—Ⅱ、Ⅰ—Ⅱは△ヒキ▽成員であり、△ソオーデンチャー▽、Ⅱ—Ⅰは

△ヒキ√成員であり、△ハロージ√である。結局、固定化した集団の△ヒキ√成員は、Egoを誰にしても、集団の枠は一定しており、構成員は変らないが、△ソオーデンチャー√・△ハロージ√は、Egoを誰にするかによって（未婚の兄弟姉妹以外は）、構成員は異なる。そして、固定化した集団の△ヒキ√は、Ancestor Centeredで父系（男系）が強調される性格、であるのに対し、△ソオーデンチャー√・△ハロージ√は、Ego centeredで双系的な性格であると言える。血縁関係認知の場合の△ヒキ√は、双系的性格が潜在的な可能性として基盤にあり、系の選択が行われると顕現化する性格であると言えよう、そして△ヒキ√が特に顕在化するものは、概して部落の祭りとか祖先祭祀などの聖的な場面とか、選挙などの公的な場面とか、配偶者の選択という、集団の存続が問題にされるような場面であるのに対し、△ソオーデンチャー√△ハロージ√は日常生活とか通過儀礼などの相互扶助的な関係の場面とか。労働の場面などの世俗的分野においてであるといえよう。

Ⅲ おわりに

以上、上嘉鉄の親族組織を構成原理中心に述べてきたが、それを奄美諸島の親族組織との比較の上で、どのように位置付けられるかを考察して、結びに代えたい。奄美の△ヒキ√に関しては、その双系性・父系性をめぐる論争が展開され、結局は、双系的（Cognatic）な性格を基盤にしているとの見方で一致したかのように思われる。しかし調査報告の中には「父系血縁集団」と規定したものも見られる。それ程父系性が顕著でなくとも、奄美大島・屋鈍を調査し

た村武精一氏は、「*Tri:bia*（△ヒキ√筆者記）は理念的には父系観念を指向する場合が多い。」が「さまざまな具体的な場では、父方と母方双方のEgo間で選択してゆく傾向が強くみられる。」（一九七〇、九七三頁）とか、徳之島を調査した牛島巖氏は、祭祀儀礼、祖先祭祀、その他の要因で△ヒキ√が団体として固定化する場合に、「父系への傾斜をたどりながらも、それをみい出す。」（一九六七、二二頁）性質として扱えたものもある、一方父系性の存在を全く見出されないものもある。たとえば、奄美大島宇検村田検部落を調査した関敬吾氏は、広義の△ヒキ√と位置付けたりして、「（△ヒキ√は）、父の父・父の母・母の父・母の母、およびその血縁を含む双象のないし、多系的親族集団ないし、関係である。」（一九五九、三三七頁）と規定した、また奄美大島全域にわたる調査と系図から、中枝千枝氏は、「『ヒキ』は決して父系、または単系血縁を意味する」ものでなく、「一種の双系血縁の概念で整理された『血統』をさす。」（一九六四、二二二頁）ものと扱っている、伊藤幹治氏も加計呂麻島の△ヒキ√について、母方の血縁親戚が含まれている事を指摘している。このように、奄美諸島の△ヒキ√は多様な性格を示している事が窺える。上嘉鉄の場合も、発現するレベルで、異った構成原理となり、どちらに重点を置くかによって、様相が異なる事から、ひとえに地域的な差違にとどまらず、その多様性に首肯出来る。上嘉鉄の場合は、固定化した集団形成の際の△ヒキ√は、Kremer氏の報告した加計呂麻島のように、父系血縁集団とは規定出来ないが、その他のどの地域よりも父系が強調されていると言えよう。そして△ヒキ√系と△ハロージ√系

の構成原理の差相は、奄美諸島全域に共通した性格であると言えよう。

〔注〕

- ① 例えば、村武精「琉球・奄美の社会人類学」（日本民族学会編『日本民族学の回顧と展望』一九六六、二〇〇頁～二〇五頁）北嘉政夫「ハヒキ√の概念と八門中√」（都立大学社会人類学研究室『社』一―三・四号一九六七、八頁～一〇頁）馬淵東一「波照間島その他の氏子組織」（『日本民俗学会報』四一、一九六五九頁）
- ② Kreiner J. 「ノロ祭祀集団における神役の継承」（『民族学

研究』二七―一 一九六二、三八六頁）

- ③ 村武精「奄美の親族名称―宇検村屋鈍を中心に―」（平山輝男教授還暦記念論文集、『方言研究の問題点』、一九七〇）
- ④ 牛島巖「奄美群島・徳之島における祭祀団体と親族組織」（都立大学『社会人類学研究会報』四、一九六七）
- ⑤ 関敬吾、前掲書
- ⑥ 中枝千枝 前掲書
- ⑦ 伊藤幹治「奄美の神祭―加計呂麻島ノロ神事調査報告」（『国学院大学日本文化研究所紀要』三、一九五八、）
（埼玉県浦和市領家二―四―一九）